135.

616.925-09

自昭和8年至昭和11年入院
流行性腦炎患者ノ統計的臨牀觀察

岡山醫科大學柿沼内科教室

助教授 醫學博士 日 下 連

副 手 醫 學 士 中 島 節 夫

[昭和12年10月14日受稿]

Aus der Medizinischen Klinik der Medizinischen Fakultät Okayama.

(Vorstand: Prof. Dr. K. Kakinuma)

Statistischer Bericht über Encephalitis epidemica
in den Jahren 1933—36.

Von

Dr. M. Kusaka u. S. Nakashima.

Eingegangen am 14. Oktober 1937.

Als Ergänzung zu dem Vortrage in der med. Gesellschaft von Prof. Dr. K. Kakinuma im Jahre 1936 haben die Verff. statistische Beobachtungen angestellt bei 61 Kranken, die an Encephalitis epidemica litten und in die med. Abteilung aufgenommen wurden. Das Ergebnis lässt sich wie folgt zusammenfassen:

Das männliche Geschlecht wurde mehr als das Weibliche von der Krankheit befallen. Bei alten Leuten und Kindern trat sie meistens auf. Der Ausbruch der Krankheit erreichte den Höhepunkt im Jahre 1933 im August, im Jahre 1934 verspätete sie sich etwas. Im nächsten Jahre trat sie von Ende Oktober an auf.

Als prodromale Erscheinungen, die meistens weniger als 24 Stunden dauerten, wurden Kopfweh, allgemeine Mattigkeit und Hitzegefühl, in einigen wenigen Fällen Übelkeit, Erbrechen und Muskelschmerzen angegeben. Fieber war ein konstantes Symptom und dauerte durchschnittlich 6—8 Tage

Die Nervensymptome charakterisierten sich durch ihre täglichen Schwankungen, die im allgemeinen parallel gingen zu dem Ablauf der Körpertemperatur, wie es schon früher gesagt wurden ist. Der Blutbefund zeigte in der Fieberperiode Leukozytose mit Neutrophilie. Der Liquor war wasserklar, ihr Druck meistens zwischen 150—200 mm, die Zellenzahl 50—100. Die Globulin-Reaktion immer positiv. Der Harn zeigte Spuren von Eiweiss, sonst o. B. Mortalität 25,0—30,1%. Die Patienten starben meistens nach 4—6 Krankheitstagen. Es ergibt sich also, dass der Verlauf der Krankheit mit den früheren Epidemien, über die berichtet wurde, fast übereinstimmt.

(Kurze Inhaltsangabe)

目 次

- I. 緒 言
- II. 觀察事項
 - 1) 入院患者男女別並年齢的關係
 - 2) 患者發病ト月別
 - 3) 前驅期及ビ前驅期症狀
 - 4) 發病後ノ症狀
 - (イ) 發熱及ビ熱型
 - (ロ) 神經系統ヨリノ症狀
 - (ハ) 血液所見
 - (ニ) 腦脊髄液所見
 - (ホ) 尿所見
 - 5) 豫 後
- III. 結 論

文 獻

I. 緒 言

流行性腦炎ニ關スル各種研索ハ大正13年本邦大流行以來長足ノ進歩ヲ見今日一ノ獨立性疾患トシテ確認サレルニ至レリ。而シテ本邦ニ於ケル研究過程ヨリスレバ之ヲ大正13年以前, 大正13年以後昭和8年迄, 及ビ昭和8年以後ノ3期ニ區別シ得ベク, 本疾患病理解剖學的, 流行病學的並臨牀醫學的諸事項

ニ關シ闡明セラレタルハ第2期ニシテ, 本病病毒ガ所謂濾過性向神經性病原體ナルコトノ明カニサレタルハ昭和8年以後即チ第3期ニ屬ス(柿沼教授)。

余等ハ此處ニ昭和8年即チ日本學術振興會第三小委員會開設以後11年ニ至ル我内科ニ入院セル腦炎患者ニ就キ其ノ病歴ニヨリ逐日的ニ第15病日迄ノ諸事項ニ關シ統計的觀察ヲ試ミタルヲ以テ以下之ヲ詳述セントス。

本報告中ノ一部ハ先ニ柿沼教授ガ第33回日本內科學會總會宿題報告トシテ敘述サレタル部分ニモ包含サレアルコトヲ附言ス。

尙ホ昭和9年度入院患者ハ1名ニシテ而モ發病後2週以上ノ經過後入院セルヲ以テ本統計ヨリハ除外スルコトトセリ。

II. 觀察事項

1) 入院患者男女別並年齢的關係

腦炎患者ノ男性ニ多キハ海外ノ例モ同様ニ本邦ニ於テモ同傾向ニアリ。我教室ニ於ケル狀況ハ第1表ニ示セル如クニシテ總計男37人, 女24人ニシテ從來ノ報告ノ如ク男性ニ多キヲ示セリ。然レドモ21—40年代ノ壯年期ニ於テハ女子ニ稍々多

第1表 男女別並ニ年齢的關係調

年齢 男女別	1—20		21—40		41→	
年度	男	女	男	女	男	女
昭和8年	4	6	2	4	10	4
昭和10年	8	3	2	3	7	0
昭和11年	3	2	0	0	1	2
合 計	15	11	4	7	18	6

シトセラル。即チ我々ノ統計ニ於テモ例數ハ少數ナレドモ女子ニ多キヲ示セリ。

次ニ年齢的ニ之ヲ見レバ、一般ニ我邦腦炎ハ小兒及ビ高年者ニ罹患率大ニシテ壯年者ニ少シ。上表ニ於ケル我教室ノ統計モ同様ニシテ壯年者ニ少シ。

要之年少者及ビ高年者ニ罹患率大ニシテ斯ル年齢ニテハ男性ニ多キガ如キ觀ヲ呈セリ。

2) 患者發病ト月別

第2表 入院患者發生月別表

月別 年度別	VII			VIII			IX			合計		
旬別	上旬	中旬	下旬	計	上旬	中旬	下旬	計	上旬	中旬	下旬	計
昭和8年			1	16	9	2	27		2		2	16
昭和10年		3	3	8	11	1	20					8
昭和11年									2	6	8	24
合 計		4	4	24	20	3	47		4	6	10	24

我入院患者ノ發病日ヲ月別及ビ旬別スレバ上表ノ如ク昭和8年度ハ8月ヲ、昭和10年ニハ7月下旬乃至8月中旬ヲ、而シテ昭和11年度ニ於テハ9月中旬乃至9月下旬ヲ主發期トナス。

之ハ毎年8月又ハ9月ニ本病ノ大發生ヲ見ルト謂ヒシ飯村氏ノ調査ト一致スル處ナリ。

三田村教授ニヨレバ患者多發期ハ年度ニヨリ又處ニヨリテ所謂早發性及ビ晚發性ノ如ク區別アルモ其ノ簇發スル期間ハ一定ニシテ4週乃至7週平均40日前後ニテ(大正13年大流行時2箇月ニ亙レルモノヲ除ク)、又流行時ニハ患者ノ發生ハ流行ノ大小ニ關係ナク逐日増加シテ極期ニ達シ次第順次減少シ一度減少スレバ再び増加スルコトナシト。我入院患者ノ發生狀況モ此間ノ消息ヲ明カニセルモノト思惟ス。

參考ノ爲メ岡山縣下流行性腦炎發生狀況ヲ掲グレバ第3表ノ如シ。

第 3 表 岡山縣下流行性腦炎發生狀況 (岡山縣衛生課調)

3) 前驅期及前驅期症狀

本病潜伏期ノ不明ナル如ク前驅期モ亦確然タルコトハ明カナラズ。余等ノ入院患者ニ就テナセル統計ニヨレバ第4表ニ示ス如クニシテ約70%以

上ニ於テ發病當日或ハ前日迄平素ノ業務ニ從事シ得タル結果トナル。即チ此期ノ持續ハ表示ノ如ク稀ニ10日間ニ互ルモノアレド大多數ニ於テ1兩日ノ短期間ノモノト推測セラル。

第 4 表 流行性腦炎前驅症狀持續日數推定表

日 數		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	不明	計
例	昭 8	18	3	0	4	1	2	0	1	0	0	1	0	30
	昭 10	10	10	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	23
	昭 11	3	1	0	2	0	1	0	0	0	0	0	1	8
數	計	31	14	1	6	1	4	0	1	0	0	1	2	61
百 分 率		50.8	23.0	1.7	9.5	1.7	6.6	0	1.7	0	0	1.7	3.3	100.0

前驅期症狀ヲ病歴ニヨリ拔書表示スルニ第5表ノ如キ状況トナレリ。即チ頭痛、倦怠、熱感ノ3者最モ多ク嘔吐、食思不振等々ハ甚ダ少數ナリ。勿論之等症狀ハ流行年度ニヨリ、又年齡的差異等

ニヨリ多少異ル點モアリ得ベキモ我等ノ例ニ於テハ之ヲ年度別、生死別、或ハ年齡別ニ觀察スルモ認ムベキ差異ヲ見出し得ザリキ。

第5表 流行性腦炎患者前驅症狀調

年 齡	症 狀	頭 痛	倦 怠	熱 感	嘔 吐	食 思 不 振	體 痛	不 機 嫌	惡 寒	頭 重	不 眠
0—20	昭8	2	3	2							
	昭10	5	5	8	3	2	2		1		
	昭11	2	1		1						
21—40	昭8	2	2					1			
	昭10	3	2	2	1	1			1		
	昭11										
40—65	昭8	5	3							1	1
	昭10	3	2	3				1			
	昭11	1	2	2		1	2				
合 計		23	20	17	5	4	4	2	2	1	1
生	昭8	5	7	1				1			
	昭10	7	4	9	3	2	2				
	昭11	3	2	1	1	1	1				
死	昭8	4	1	2						1	
	昭10	4	5	3	1	1		1	2		
	昭11		1	1			1

4) 發病後ノ症狀

本疾患ハ前述セル如ク所謂濾過性病毒ニヨル 1 ツノ全身病ナルヲ以テ種々各種臓器ヨリノ症狀アルモ臨牀上重要ニシテ且診斷上ノ核心トナルハ神經系統ヨリノ症狀、熱型、腦脊髄液所見及ビ血液所見等ナリ。從ツテ余等モ之等諸事項ニ關シ各々統計觀察スル事トセリ。

以下ニ掲グル各表ハ患者病歴ニヨリ各病日毎ニ記載サレタル症狀ヲ第 15 病日迄抜書シ之ヲ總計シタルモノニシテ各症狀ノ頻度並ニ持續程度等ハ數ヲ以テ現セリ。故ニ臨牀上重要ナル症狀モ一過

性ノ短期ノモノハ計數上ハ小ニ、又頻度ハ少キモ持續日數ノ長キモノハ大トナリ居レドモ本表ニヨリテ本病ニ來リ得ベキ症狀ノ種類、頻度、持續程度或ハ重要性等ニ就テハ其ノ大體ヲ推察シ得ベシ。

(イ) 發熱及ビ熱型

發熱ハ本病ニ來ル必發症候ノ 1 ツナリ。余等ノ例ニテハ其ノ程度ニ差コソアレ發熱ナキモノ 1 例モナシ。即チ熱上昇期、高熱持續期及ビ下降期ノ各持續日數ヲ年齡別ニ大別スレバ第 6 表並附圖ニ示ス如クニシテ 1 日ニシテ最高ニ達スルガ殆ト全部ト云ヒ得。高熱持續日數ハ 4—5 日ニ亙ルモノ最

第 6 表 流行性腦炎患者發熱表

年 齡	1—20				21—40				41→				合 計			
	上 昇 期 日 數	高 熱 持 續 期 日 數	下 降 期 日 數	有 熱 期 總 日 數	上 昇 期 日 數	高 熱 持 續 期 日 數	下 降 期 日 數	有 熱 期 總 日 數	上 昇 期 日 數	高 熱 持 續 期 日 數	下 降 期 日 數	有 熱 期 總 日 數	上 昇 期 日 數	高 熱 持 續 期 日 數	下 降 期 日 數	有 熱 期 總 日 數
1	22	0	6	0	9	0	2	0	24	0	6	0	55	0	14	0
2	1	0	8	0		2	5	1	1	0	6	0	2	2	19	1
3		0	3	0		0		2		6	4	2		6	7	4
4		5	1	1		2		0		5	1	5		12	2	6
5		7		4		1		2		4	0	2		12	0	8
6		2		6		2		0		5	0	3		9	0	9
7		6		4		2		1		2	0	4		10	0	9
8		1		4				2		0	1	2		1	1	8
9		2		3				0		1		2		3		5
10				0				1		1		1		1		2
11				0				0		1		2		1		2
12				2				1				0				3
13												0				0
14												0				0
15												2				2

第 6 表 附 圖 (1)

第 6 表 附 圖 (2)

モ多ク次デ6—7日ニ及ブモノ多シ。下降期日數ハ1日乃至2日ノモノ多ク、總有熱期日數ハ6日乃至8日ノモノ大多數ヲ占ム。之等發熱期ノ熱型ヲ區別スルニ第7表並附圖ノ如クニテ1日或ハ2日ニシテ最高ニ達シ、數日間高熱ヲ稽留、或ハ弛張性ニ持續シ、次デ2—3日ニテ下熱スル第II型ニ屬スルモノ最モ多シ、本型ハ性別、年齡別ノ如何

ヲ問ハズ生存者ニ見ルモノニシテ本病ノ定型的熱型ナリ。次ニ多キハ死亡例ニ見ル即チ第I型ニ屬スルモノナリ。其ノ他ハ少數例ニ見タルモノニテ第VI型、第VII型、第V型ノ順トナレリ。

以上ノ熱型ヲ通覽スルニ本病ニテハ第I型、II型、VI型ニ屬スル1群ガ最モ定型的且絶對多數ヲ占ムルコトナル。

第7表 流行性腦炎患者熱型表

年度	熱 型 年 齡	I 型	II 型	III 型	IV 型	V 型	VI 型	VII 型
昭 8	1—20	2	6			1		
	21—40	1	3			1		
	41→	7	6				1	1
昭 10	1—20	2	6				1	1
	21—40	1	2				2	
	41→		3				3	1
昭 11	1—20	1	3					1
	21—40							
	41→		2				1	
計		14	31			2	8	4

次ニ逐日のニ其ノ日ノ最高溫度ヲ平均シ且生死別及ビ年度別ニ圖示スレバ第1圖乃至第3圖ノ如シ、之ヲ見ルニ一般ニ死亡例ハ生存例ニ比シ高熱ヲ示シ、又其ノ持續期間モ長キ結果トナル、各年度相互間ニハ認ムベキ變化ナシ。

第1圖 昭和8年度發熱平均

生存例

死亡例

第2圖 昭和10年度發熱平均

生存例

死亡例

第3圖 昭和11年度發熱平均

生存例

死亡例

(ロ) 神経系統ヨリノ症状

神経系統ニ關スル症状ヲ前述ノ條件ノモトニ
1—20, 21—40, 41→ノ3年期ニ分チテ拔書シ表

示スレバ第8表ノ如シ (各年度別ニ於ケル統計モ
大體ニ於テ差異ナキヲ以テ各年度總計セルモノヲ
表示セリ).

第8表 神經系統ヨリノ症狀

症 状	精神障害症状			反 射	脳 神 經			症 狀	膀胱及び直腸露障			癱瘓及び四肢筋症状																																				
	昏濁	昏瞶	不語		健忘	腹壁反射亢進	巴賓斯基氏反射		眼瞼下垂	眼球運動異常	結膜充血	瞳孔散大不正縮小	孔對光反應無シ	複視及視野力異常	假面性顔面神經麻痺	舌震顫運動障礙	嚥下困難	發音不遜	失音閉鎖	尿閉失禁	大便失禁	強直性痙攣・間歇性痙攣	慢性吃字癇	半身不遂・痲痺	全身不全痲痺	無意識的運動	筋力減退	知覚過敏	握痛																			
1-20	125	418	3	55	27	46	933	1	117	28	11	12	0	0	2	16	12	8	9	2	4	6	0	12	0	2	1	1	8	2	0	1	1	1	4	47	35	4	11	0	6	5	31	13	12	5	0	2
21-40	41	0	0	17	18	25	6	1	0	0	6	10	4	4	0	0	0	2	0	1	4	1	2	6	2	5	1	0	0	0	0	2	0	0	5	9	15	1	0	1	0	0	231	3	0	2	0	0
41→	118	115	264	22	56	21	9	4	0	15	23	27	12	2	1	7	5	1	6	12	3	2	12	5	23	8	0	9	11	3	3	1	4	3	1	45	78	21	31	16	111	680	7	20	11	2	0	
合計	284	533	5136	67	127	36	43	5	138	61	42	28	2	1	9	23	13	15	25	6	8	24	740	9	210	12	11	5	3	5	4	755	140	57	35	28	117	13142	23	32	18	2	2	2				

例数

100
90
80
70
60
50
40
30
20
10

本表ニヨレバ精神障礙症狀ノ内最多キハ意識
渾濁及ビ嗜眠ト譫語、譫妄ナリ。腦膜症狀トシテ
ハ其ノ刺激症狀ヲ呈スルモノ多ク、殊ニ年少者及
ビ高年者ニ多キ傾向ヲ示セリ。聽反射異狀ニテハ
亢進ヲ見ルモノ多ク減弱乃至消失ハ少シ、而シテ
之等又何レモ高年者クハ年少者ニ多シ。

腦神經症狀ハ他症狀ニ比シ、其ノ出現頻度一般
ニ少キ傾向ニアリ、此内瞳孔及ビ結膜變化ハ高年
者ニ、眼瞼下垂其ノ他眼球運動異常ハ年少者ニ多
キヲ示セリ。

直腸、膀胱障礙ハ各年代ヲ通ジテ可成多數ニ其

ノ出現ヲ見ル。軀幹並ニ四肢筋症狀トシテハ筋強
剛ヲ呈スルコト必發症狀トモ云ヒ得ベク各年齢ヲ
通ジテ多キモ特ニ高年者ニ多シ。其ノ他頻度少キ
モ舞蹈病様、アテトーゼ様、又無意識的運動ハ年
少者ニ多キ結果トナレリ。

次ニ第8表ニ示セル各種症狀ヲ頻度大ナルモノ
ヨリ順次列舉圖ニテ示セバ第4圖ノ如シ。即チ本
圖ニヨレバ本症ニ出現シ得ベキ主症候乃至ハ診斷
上重要視スベキ各種症狀ノ出現頻度ヲ知り得ベク
殊ニ第1意識渾濁及ビ嗜眠以下アテトーゼ、舞蹈
病様運動ニ至ル23項目ニ亙ル各種症狀ハ本病診

第 4 圖

断ニ當リ注意スベキモノト信ズ。

更ニ上掲第8表神経系統症状ヲ病日別ニ尙ホ生

死別ニ圖示スレバ第5圖1及ビ2ノ如シ。

本圖ニヨリテ各症状ノ病日ニヨリテノ出現頻度

ヲ検討センニ第1病日即チ熱上昇期ニ於テハ頭痛,

意識渾濁及ビ嗜眠, 嘔吐, 譫語, 譫妄等現レ之等

第 5 圖 ノ 1

生 存 例

死 亡 例

[illegible]

ノ症状ハ本症ニ必發性ノモノトモ云ヒ得ベク、其ノ他尿失禁、便秘、強直性或ハ間代性痙攣、舞踏病様、アテトーゼ様運動、腱反射ノ亢進乃至減弱等出現ス。第2病日乃至第3病日トナリ發熱程度モ最高ニ達スルニ至レバ頭痛嘔吐等ノ初發症狀ノ緩解スルニ反シテ意識混濁、譫語、譫妄ノ程度益々

強ク、更ニ項部強直、牙關緊急、ケルニツヒ、腱反射亢進等ノ腦膜刺激症

狀モ加リ、又筋強直、振顫等ノ筋症狀モ新ニ出現ス。膀胱、直腸障礙モ其ノ程度強クナリ多クハ兩便共ニ失禁トナル。

次ノ第4、第5、第6病日即チ高熱持續ノ極期ニ至レバ以上ノ主症狀ノ増加ニ併セテ神経系統ヨリノ各種症狀多種多様ニ又不安定ニ出沒錯綜極リナシト謂フベキ狀態トナルハ本圖ニヨリヨク觀取セラルベシ。第7、第8病日トナリ熱モ下降期ニ入レバ敍上ノ各種症狀ハ次第ニ減退消失スルニ至ル。之ニ反シテ下熱後ニ至ルマデ可成長期ニ亙リ存續スルハ多少ノ腦膜刺激症狀、兩便排泄異常、筋強剛等ナリ。

以上ノ神経系統ニ關スル各種症狀ハ圖示セル如ク全ク「ブント」ト謂フベキ狀態ナルモ、之ヲ通覽スルニ病日的ニ其ノ出現

狀ニ一定ノ律序ヲ認メ得ベク、尙ホ大體體溫ノ經過ニツレテ移動スルヲ觀取シ得ベシ。即チ斯ル點ガ本病診斷時ニ、殊ニ之等各種神經症狀ノ個々ヲ示ス他症トノ鑑別ニ重要ナル目標トナリ得ルナリ。此點ニ關シテハ夙ニ柿沼教授ノ強張サルル處ナリ。

(ハ) 血液所見

本病診斷ニ際シテ重要ナルハ必發症狀タル發

第 9 表 流行性腦炎患者血液像

第 6 圖

熱, 神経系統症状ノ外ニ血液像, 腦脊髄液所見等ナリ。

我入院患者ノ血液像ヲ表示スレバ第9表ノ如シ。赤血球數及ビ血色素量ニ特異ノ變化ナク正常範圍内ノモノ最モ多數ニシテ僅ニ増加ノ傾向ヲ示セルモノ少數例ニ存ス。

白血球數ハ中等度ノ増多症ヲ示セルモノ多數即チ 10,000—20,000 迄ノモノ最大多數ニシテ正常値ノモノ之ニ次ギ, 2 萬以上或ハ 6000 以下ハ稀ナリ。

白血球ノ百分率ハ本症ニ特有ト稱スベキニアラザレドモ白血球増多症ト共ニ本症診斷上重要ナル目標トナル。即チ中性嗜好細胞ノ増加ハ絶對的ニ大多數ヲ占メ, 僅ニ正常値ヲ示スモノアルニ過ギズ。淋巴細胞, エオジン嗜好細胞, 大單核, 移行型細胞等何レモ減少ヲ來スモノ多ク, 正常値或ハ増加ヲ來スモノ少シ。其ノ他異常細胞ノ出現ナシ。

次ニ病日ニ血液像ノ經過ヲ見ルニ第6圖ノ如シ(生死例共ニ大體ニ於テ變化ナカリシヲ以テ一括圖示セリ)。第2病日頃ヨリ第6—第7病日ニ至ル迄ハ赤血球, 血色素量ハ正常値ヲ示セドモ, 白血球ハ増多症ヲ來シ, 其ノ百分率ニ於テハ淋巴球, エオジン嗜好細胞, 大單核及ビ移行型細胞ノ絶對的減少症ヲ來セリ第7病日以後即チ下熱期乃至恢復期ニ於ケル血液像ノ移動ハ○圖ニ示セル如ク一定ノ傾向ヲ認め得ザルモ, 之ハ此期ニ於ケル血液検査回數ノ少キ爲メ(1週

1 回乃至 2 回) 統計上ニ認めベキ所見ノ現レザリシモノト思惟ス。

(ニ) 腦脊髄液所見

本病患者腦脊髄液壓ハ一般ニ著シク高カラザルヲ例トシ通例側臥位ニテ 90—250 多クハ 120—200 mm 水柱トセラル。余等ノ例ニ見ルニ第10表ノ如ク從來ノ報告ト同ジク 150—200 mm 水柱ヲ示セ

第 10 表 流行性腦炎患者脊髄液所見

症 狀 牛 齡	脊 髄 液 所 見																肉 眼 所 見								
	壓				細 胞 數						ノ ン ネ		バ ン デ		清 澄										
	50-100	100-150	150-200	200-250	250-300	300以上	10以下	10-30	30-50	50-100	100-150	150-200	200-300	300以上		++		+	±	-	++	+	±	-	
1-20	2	12	10	6	2	3	2	5	4	10	4	1	2	1	1	/	22	2	5	2	19	1	8	23	4
21-40	/	4	2	4	/	3	0	2	2	1	2	1	1	1	1	1	8	1	1	3	6	/	2	4	3
40-80	7	5	11	8	/	1	3	2	3	6	5	3	2	2	2	3	22	3	2	6	18	4	2	31	2
80以上	9	21	23	18	2	7	5	9	9	17	11	5	5	4	4	4	52	6	8	11	43	5	12	48	9
例数	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100															

ルモノ最も多ク、次デ100—500 及び 200—300mm
水柱ノモノ多シ。300 mm 水柱以上或ヘ100 mm
水柱以下ノモノ少シ。而シテ一般ニ若年者ニ高壓
ヲ呈スル者多キ結果トナレリ。

外觀 水様透明ナルモノ大多數ニテ所謂日光微
塵像ヲ呈セルモノ僅少ニ存セリ。

細胞數 50—100 ノモノ最も多ク 100—150 之
ニ次ギ 50 以下或ヘ 200 以上ノモノハ少シ。

「グロブリン反應」。

ノンネ氏反應第1相(+)ノモノ大多數ニシテ
(++) (±) (—) ノモノハ少數例ニ存ス。

パンデュー氏反應ハ大體ニ於テノンネ氏反應ト
同一程度ノ陽性率ヲ示セリ。

病日のノ推移ヲ見ルニ第7圖ノ如クニシテ病初
期ニ「グロブリン反應」陽性率大ナル外ハ一定ノ傾
向ヲ見出シ得ズ。

第 7 圖

(ホ) 尿 所 見

第 11 表 流行性脳炎患者尿所見

本症患者へ前述セル如ク膀胱, 直腸障害ヲ呈セルモノ大多數ナルヲ以テ尿採取ニハ甚シキ困難ヲ感ジ從ツテ検査例數ノ少キモ亦止ムヲ得ザル處ナリ。入院患者尿所見一覽ヘ第 11 表ノ如シ。尿ノ反應ハ多ク酸性, 比重ハ 1020 前後ノモノ大多數ナリ。蛋白反應ハ陽性ナルモノ多數ヲ占ムルモ定量的可能位ナルハ 40 歳以上ノモノニ少數例アリタル程度ニシテ他ノ多數例ハ定量不能程度ノ陽性ナリ。

糖反應ヲ認メタルモノ全然ナシ。

「デイアゾ」並ニ「グロビン」氏反應ハ僅ニ 1 例宛ニ見タルニ反シ「ウロビン」體反應ハ數例ニ認メタル。

沈渣ニテハ數例ニ少數ノ赤血球, 白血球其ノ他上皮細胞ヲ見タルニ過ギズ。

(ヘ) 豫 後

本病ノ生命ニ對スル豫後ハ流行年度, 流行場所, 發病時期, 年齡等ニヨリ差異アリ。我入院患者死亡率ハ第 12 表ニ示セル如ク昭和 8 年度ニ於テハ 36.7%, 昭和 10 年度ハ 39.1%, 昭和 11 年度ハ 25.0% ニテ平均 36.1% ナリ。高木氏ハ昭和 10 年駒込病院入院患者ノ死亡率ハ 39.4% ナルヲ報告セリ。我昭和 10 年度ノ夫レトヨク一致スルヲ觀ル。尙ホ年齡的ニ見ルニ從來ノ報告ト同ジク高年者ニ死亡率高クナレリ。

第 12 表 流行性脳炎患者生死數調

年 度 別	年 齡	1—20		21—40		41—		合 計		死亡率
		生	死	生	死	生	死	生	死	
昭 8	8	8	2	5	1	6	8	19	11	36.7
昭 10	10	8	3	2	3	4	3	14	9	39.1
昭 11	11	4	1	0	0	2	1	6	2	25.0
計		20	6	7	4	12	12	39	22	36.1
百 分 率 %		76.9	23.1	63.6	36.4	50.0	50.0	63.9	36.1	

第13表 流行性脳炎患者死亡病日調

年齢 病日	1—20	21—40	41→	合 計
1				
2		1		1
3			1	1
4	1		2	3
5		1	2	3
6	1		2	3
7	2			2
8			1	1
9	1	1		2
10			1	1
11			2	2
12	1			1
13				
14				
15				
16				
17		1	1	2
18

患者死亡病日ヲ調査スルニ 第13表ノ如ク第4乃至第6病日即チ本病ノ所謂昏睡期ニ死亡セルモノ最モ多ク、以後順次減少シ一般ニ10日前後迄ニ死亡セリ。余等ノ例ニハ第17病日ニ死亡セル2例アルモ之ハ稀ナル例ト謂フベキナリ。本死亡調査ハ第5病日迄ノ死亡44.0% 第6乃至第10病日29.2%ヲ報告セル飯村氏ノ調査ト一致セル處ナリ。

III. 結 論

昭和8年以後昭和11年ニ至ル我内科入院流行性脳炎患者ニ就キ統計的臨牀觀察ヲナシ次ノ結果ヲ得タリ。

1) 入院患者總數ハ61人内男37人、女24人ニシテ罹患率ハ一般ニ男子ニ多ク、年齢的ニ見レバ年少者及ビ高年者ニ罹患率大ナリ。

2) 患者發病日ハ昭和8年度ハ8月ヲ、昭和10年度ニハ7月下旬乃至8月中旬ヲ、昭和11年度ニ於テハ9月下旬ヲ主發期トス。

3) 前驅期ハ確然タルコト不明ナルモ70%ニ於テ發病當日或ハ前日迄平素ノ業務ニ從事シ得タリ。前驅期症狀トシテハ頭痛、倦怠、熱感最モ多ク、嘔吐、食思不振、體痛等ノ訴之ニ次ギ不機嫌、頭重、不眠等ヲ少數例ニ見

タリ。

4) 發熱ハ本症ノ必發症候ニシテ熱上昇期日數ハ1日, 高熱持續期日數ハ4—5日, 下降期日數ハ1—2日, 總有熱期日數6—8日ノモノ大多數ヲ占ム。

5) 本病ニ來ル神經系統症狀ノ内精神障礙症狀トシテハ意識濁濁及ビ嗜眠, 譫語, 譫妄ヲ, 腦膜症狀トシテハ頸部強直, 頭痛, ケルニツヒ氏症狀ヲ, 反射症狀トシテハ腱反射亢進又ハ減弱ヲ, 腦神經症狀トシテハ瞳孔ノ異常, 對光反應ノ緩慢ヲ, 軀幹四肢筋症狀トシテハ筋強直ヲ, 其ノ他兩便排泄異常等ヲソレゾレ主症候トナシ加フルニ, 不安定ナル各種症狀ノ出沒錯綜極リナキノ觀ヲ呈セリ。即チ神經系統症狀ハ全ク「ブント」ト稱スベキ狀態ナルモ, 之ヲ病目的ニ通覽スルニ自ラ其ノ出現狀ニ一定ノ律序ヲ認メ得ベク, 尙ホ且大體, 體溫ノ經過ニツレテ移動スルヲ觀取セリ。

6) 血液像トシテハ赤血球數, 血色素量ニ變化ナク, 白血球ハ中等度(10000—20000)ノ增多症ヲ示シ, 白血球百分率ハ中性嗜好細胞

ノ増加, 淋巴球, エオジン嗜好細胞, 大單核, 移行型細胞ノ減少ヲ來セリ。之等細胞ノ形態學的變化ハ認メ得ズ。

7) 腦脊髓液ハ外觀水様透明, 液壓ハ150—200mm水柱, 細胞數ハ50—100ニシテ, 「グロブリン反應」(ノンネ氏第1相(+))バンディ(+)陽性ノモノ大多數ヲ占ム。

8) 尿ハ反應酸性, 比重1020前後ノモノ多ク蛋白反應(+)(非定量的)ニシテ糖ヲ證明セズ, 「ウロビリソ體」ヲ少數例ニ證明セリ。

9) 入院患者死亡率ハ昭和8年36.7%, 昭和10年39.1%, 昭和11年25.0%, 平均36.1%ナリ。

10) 患者死亡病日ハ第4—第6病日ノモノ大多數ヲ占ム。

撰筆スルニ當リ柿沼, 北山兩教授ノ御懇篤ナル御校閲ヲ深謝ス。

本報告症例ノ入院ニ關シテハ日本學術振興會ヨリ補助ヲ仰ゲリ。記シテ謝意ヲ表ス。

文 獻

- 1) 柿沼教授, 日本內科全書, 第8卷, (流行性腦炎篇)。
- 2) 日本醫事新報社, 流行性腦炎, (昭和10年12月發行)。
- 3) 柿沼教授, 流行性腦炎, (日本內科學會雜誌, 第25卷)。